

1. Project Title

わたし
W: 私 はウィル・ウルフキエルです。

3. Significance of Study

W: そこでこのような認識の^{にんしき}違い^{ちが}はなぜ、どのように^う生まれたのか
けんきゅう ^{けんが}を^{かんが}したいと考^{かんが}えました。また、こういった認識^{にんしき}が日本^{にっほん}とアメ
リカ^{しやかい}の社会^{しやかい}にそれぞれどのような^{えいきょう}影響^{えいきょう}を^{あた}えているかも、調^{しら}べて
みたいと思^{おも}いました。

7. America Pre War on drugs 1/3 ^{まやくせんそうまえ}麻薬戦争^{まやくせんそう}前^{まえ}の^{べいこく}アメリカ^{まやくし}の、^{べいこく}米^{まやくし}国^しの^{べいこく}麻^{まやくし}薬^し史^し
として、まず 1611 (りよびやく) ^{ねん}年^{ねん}に^{あささいばい}麻^{あささいばい}裁^{あささいばい}培^{あささいばい}が^{はじ}す^{はじ}で^{はじ}に^{はじ}始^{はじ}ま^{はじ}っ^{はじ}て^{はじ}い^{はじ}ま^{はじ}し^{はじ}
た。

^{いがくてき}医学^{けんきゅう}的^{ねん}な^{ねん}研究^{はじ} ^{はじ}は^{ねん} 1860^{ねん}年^{ねん}ご^{ちゅうどく}ろ^{ちゅうどく}か^{ちゅうどく}ら^{ちゅうどく}始^{ちゅうどく}ま^{ちゅうどく}り^{ちゅうどく}、^{ちゅうどく}また^{ちゅうどく} 1889^{ちゅうどく}年^{ちゅうどく}に^{ちゅうどく}ア^{ちゅうどく}ヘ^{ちゅうどく}ン^{ちゅうどく}中^{ちゅうどく}毒^{ちゅうどく}
^{まんせいてき}や^{ちゅうどく}慢^{ちゅうどく}性^{ちゅうどく}的^{ちゅうどく}な^{ちゅうどく}中^{ちゅうどく}毒^{ちゅうどく} ^なを^な治^なす^な為^な大^な麻^なを^な使^なう^なこ^なと^なが^なあ^なり^なま^なし^なた^な。

そして、^{じょじょ}徐^{たいま}々^{たいま}に^{まやく}大^{かんれんづ}麻^{かんれんづ}は^{かんれんづ}マ^{かんれんづ}リ^{かんれんづ}フ^{かんれんづ}ァ^{かんれんづ}ナ^{かんれんづ}の^{かんれんづ}麻^{かんれんづ}薬^{かんれんづ}に^{かんれんづ}よ^{かんれんづ}り^{かんれんづ}関^{かんれんづ}連^{かんれんづ}付^{かんれんづ}け^{かんれんづ}ら^{かんれんづ}れ^{かんれんづ}て^{かんれんづ}い^{かんれんづ}き^{かんれんづ}
ま^{かんれんづ}し^{かんれんづ}た^{かんれんづ}。(could consider skipping this part)

^{ねん}1936^{ねん}年^{ねん}に^{たい}マ^{ひていてき}リ^{みかた}フ^{みかた}ァ^{みかた}ナ^{みかた}に^{みかた}対^{みかた}す^{みかた}る^{みかた}否^{みかた}定^{みかた}的^{みかた}な^{みかた}見^{みかた}方^{みかた}を^{みかた}し^{みかた}た^{みかた}「^{みかた}リー^{みかた}フ^{みかた}ァ^{みかた}ー^{みかた}・^{みかた}
マ^{えいが}ッド^{べいこく}ネ^{しやかい}ス^{たい}」^{たい}と^{たい}い^{たい}う^{たい}映^{たい}画^{たい}に^{たい}よ^{たい}り^{たい}、^{たい}米^{たい}国^{たい}の^{たい}社^{たい}会^{たい}は^{たい}マ^{たい}リ^{たい}フ^{たい}ァ^{たい}ナ^{たい}に^{たい}対^{たい}す^{たい}る^{たい}
^{いけん}意^か見^{ねん}が^{ねん}代^{ぜいほう}わ^{かけつ}り^{かけつ}、^{ねん}1937^{ねん}年^{ねん}に^{ねん}マ^{ねん}リ^{ねん}フ^{ねん}ァ^{ねん}ナ^{ねん}税^{ねん}法^{ねん}が^{ねん}可^{ねん}決^{ねん}さ^{ねん}れ^{ねん}ま^{ねん}し^{ねん}た^{ねん}。(could
consider skipping this part)

8. America Pre War on drugs 2/3

ねんだいしよとう りようしゃ いっぱんてき
1900年代 初頭 にマリファナの利用者は一般的 ではありませんでした
が、マリファナはメキシコ人^{じん}の出稼ぎ労働者^{でかせ ろうどうしゃ} や黒人^{こくじん}のジャズミュージシャンのコミュニティで人気^{にんき}になった^いと言われていました。(could consider skipping, this part is covered by bullet 3)

べいこく たい にんしき けい
しかし、これは、米国のマリファナに対しての認識^{にんしき}がメキシコ系^{けい}の人^{ひと}々^{びと}や黒人^{こくじん}の人^{ひと}たちへの偏見^{へんけん}に影響^{えいきょう}したと考^{かんが}えられます。

ねん あさせんい たい おこな
1916年にランドルフ・ハーストはマリファナや麻繊維^{あさせんい}に対して行^{おこな}ったキャンペーンの中で「マリファナを吸^すっているメキシコ人^{じん}やアフリカ系アメリカ人が白人^{はくじん}にたいして失礼^{しつれい}で、女性^{じょせい}をレイプしたりする」や「ジャズはマリファナがもたらした悪魔^{あくま}のブードゥー」などという人種差別^{じんしゆさべつ}の発言^{はつげん}をしました。

はくじん りようしゃ すく しょうこ
ACLUによると、白人^{はくじん}のマリファナ利用者が少^{すく}ないという証拠^{しょうこ}がない
にもかかわらず、アメリカの黒人^{こくじん}のマリファナ所持^{しよじ}の逮捕数^{たいほすう}は白人^{はくじん}と
くら ばい しゅう けい じん たいほ
比べると3.7倍^{ばい}で、ニューヨーク州^{しゅう}のラテン系アメリカ人の逮捕^{けい}
すう ばい ひじょう たか
数は4倍^{ばい}と非常^{ひじょう}に高^{たか}くなっています。

9. America Pre War on drugs 3/3

1960年代から70年代の初頭までマリファナはヒッピーやボヘミアンの文化と関わり、マリファナの使用率が増え社会の意見が変わってきました。そして、1977年にカーター大統領の政権は公に30g以下までのマリファナの合法化を唱えました。

(Can skip carter stuff)

20. American Education 1/2

1983年にロスアンゼルスで青少年の薬物乱用に対応して薬物乱用防止教育 D.A.R.E というプログラムが始まりました。(D.A.R.E, 2019)米国の学校で麻薬教育に関するクラスが少なかったため、D.A.R.E は早くに全国のプログラムとして広がりました。このプログラムは「悪影響がある麻薬について特定の情報を教えることを強調しました。D.A.R.E の設立後ファーストレイディナンシー・レーガンの「ただノーと言おう」の偶発的な発言は全国で麻薬の教育を支えるキャンペーンとして親と学生組織に広められました。

21. American Education 2/21986^{ねん}年に、ナンシー・レーガンは「麻薬の無^{まやく な}
いアメリカの組織^{そしき い}」と言う反麻薬運動^{はんまやくうんどう}を樹立^{じゆりつ}しました。マリファナ
は「ゲートウェイドラッグ^よ」と呼ばれ、マリファナは中毒性^{ちゆうどくせい}が高い^{たか}
などと教^{おし}えました。しかし、これらの主張^{しゆちよう}は医学的根^{いがくてきこん}きよがありません
でした。他の調査^{ほか ちょうさ}によると、D.A.R.E.や「ただノーと言おう^い」の
キャンペーンは、若者^{わかもの}が麻薬^{まやく}を試^{ため}したい気分^{きぶん}をよくせいしたという
証拠^{しょうこ}がありません。

25. Survey Results Part 1^{つぎ}次^{けんきゆうけつか}に研究結果^{はな}についてお話し^{おも}したいと思いま
す。研究^{けんきゆうしつもん}質問^{にっほん} 1 は、「日本^{にっほん}とアメリカ^{たい}におけるマリファナ^{たい}に対す
る一般^{いっぱんにんしき}認識^{しき}とはどのようなものか」でした。

26. Marijuana user image

まず、社会^{しゃかい}のマリファナ使用者^{しようしや}に対するイメージ^{たい}とは何か^{なに}と聞いたと
ころ、日本^{にほん}の回答者^{かいとうしや}の最^{もっと}も多^{おお}かった答^{こた}えは「危険^{きけん}」で、アメリカの
回答者^{かいとうしや}は「自由主義者^{じゆうしゆぎしや}」と答^{こた}えました。

27. Sleep analysis

つぎ すいみん しつ かん いけん き
次に、睡眠の質に関する意見について聞いたところ、アメリカの
かいとうしゃ にっほん しょうしゃ すいみん しつ こうじょう おも
回答者と日本の使用者はマリファナは睡眠の質を向上させると思
っています、マリファナを経験した事がない日本人は睡眠の質を
こうじょう おも こと
向上させると思っていないという事がわかりました。

28. Addiction

ちゅうどくせい かん いけん じん にほんじん
そして、中毒性に関する意見についてですが、アメリカ人と日本人
しょうしゃ ちゅうどくせい ひく こた
のマリファナの使用者は、マリファナは中毒性が低いという答えが
おお にほんじん けいけん こと かいとうしゃ
多かったですが、日本人でマリファナを経験した事がない回答者は
ちゅうどくせい たか かんが
中毒性が高いと考えているようです。

29. Part 1 Summary of Findings

ここで、研究 質問 1 の結果のまとめです。

日本のマリファナを経験した事がある回答者 も無い回答者 も、
社会 のマリファナ使用者に対するイメージは危険だという事がわかり
ました。この理由で考 えられることは日本のマリファナのイメージ
は大麻とマリファナだけではなく、脱法 ハーブ も含まれているからか
もしれません。

60年代 のアメリカの対抗 文化運動 に影響 を受けて、アメリカでは
マリファナ使用者に対するイメージは自由主義的になりましたが、日本
ではまだそのような運動 もなく、マリファナの使用に対する考 え方
が保守的だと言えるでしょう。

アメリカの回答者 と日本の使用者はマリファナが中毒性 が低いと
答えたましたが、日本のマリファナを経験 した事がない人は
中毒性 が高いと答えました。

最後に、ご指導くださった先生方 と支えてくださった友達 に感謝 を
いたします。本当にありがとうございました。